



Title	「山月記」および「人虎伝」における唐以前の虎の変身語要素の伝承
Author(s)	王, 貝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 47-56
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/54548">https://doi.org/10.18910/54548</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「山月記」および「人虎伝」における唐以前の虎の変身譚要素の伝承

王貝

## 1 はじめに

中島敦の短編小説「山月記」は、人が虎に変身する変身譚として広く知られている。この物語の下敷きとなる中国唐の時代の伝奇小説である「人虎伝」も芸術性の高い文学作品として注目を浴びている。「人虎伝」は唐の時代に書かれた物語ではあるが、その前（唐以前）にもすでに人が虎に変身する変身譚が数多く書かれてきた。そして、物語は多かれ少なかれ、前の時代の文学作品の影響を受けることが考えられる。では、唐以前の虎の変身譚において、変身の理由や変身前後の状態など、どのような要素が存在するか。これらの要素は、時代を追ってどのように変化してきたのか。また、「山月記」およびその素材となる「人虎伝」においては、唐以前の虎の変身譚のどの部分の要素が吸収されたか。上述の2作品は唐以前のどの時代の虎の変身譚にもっとも影響を受けているのか。

本研究では、上記4つの疑問を解決するために、まず、宋代初期に成立した『太平御覧』を用いて、そこに記載された虎にまつわる変身譚を時代を追って見ていく。次に、「山月記」と「人虎伝」を比較する上で、2つの変身譚の中で、唐以前の虎の変身譚のどのような要素が継承されてきたかを明らかにしたい。

また、「山月記」と「人虎伝」の比較研究として、上尾（1974）坂口（2006）坂口（2007）などが挙げられる。上尾（1974）は、「山月記」の下敷きとなる物語は『唐代叢書』に収録された「人虎伝」であることを証明した。富永（1978）は中国の六朝時代の化虎譚を分類した上で、それを唐伝奇小説における化虎譚と比較し、六朝時代の化虎譚が唐伝奇小説へと文芸化されていく過程について論述した。本研究は、先秦時代から魏晋南北朝までの虎にまつわる変身譚を時代を追って見ていく上で、特に変身の理由および変身前後の状態という2つの角度から、「山月記」と「人虎伝」の中で、唐以前の虎の変身譚のどのような要素が継承されてきたかを検討する。

## 2 『太平御覧』における唐以前の虎の変身譚

本研究では資料の網羅性を優先させたいため、『太平御覧』を主な参考資料とする。これは、『太平御覧』は引用書目の数がもっとも多い中国の類書だからである。『太平御覧』は、巻頭にある書目によれば取扱いの引用書目が1690種に及んでおり、類書として広く知られている『太平広記』の343種よりもはるかに多い。また、『太平御覧』は散逸した文献に関する引用記述があったため、資料的価値が高いと言える。

本章では、『太平御覧』における虎の変身譚を時代順に考察する。具体的に、2.1では、『太平御覧』から抽出した虎の変身譚を人から虎への変身、虎から人への変身という2つのパターンに分け、時代順に整理し、概観する。2.2では、変身の理由について考察し、中に变化したものと継承されたものを提示してみる。2.3では、変身前後の状態について考察する。

### 2.1 虎の変身譚の概観

筆者は「中国哲学書電子化計画」のデータベース<sup>1</sup>を利用して『太平御覧』における「虎」に関する記述を収集し、さらにそこから虎の変身譚と見られる記述を抽出した。虎の変身譚には、既

<sup>1</sup>中国哲学書電子化計画データベース：http://ctext.org/zh 利用日：2014年12月8日。

存の変身譚の継承と発展と見做される要素もあるが、新たに創造された要素もある。そのため、虎の変身譚の変化プロセスを明らかにするために、時代を追って見ていく必要があると考えられる。

また、中国では、人間と虎との付き合いが上古時代まで遡ることができる。こうした付き合いの中、虎に関する認識も次第に深まり、中国独自の虎文化として形成されてきた。虎の変身譚は一種の虎文化である一方、虎文化の影響を受けているため、虎の変身譚を孤立的に見ることができない。したがって、虎の変身譚を概観する際に、同時代および前の時代の虎のイメージと照らし合わせながら考察することにする。

『太平御覧』から抽出した結果、虎にまつわる記述は先秦時代 20 箇所、漢時代 59 箇所、魏晉南北朝時代 90 箇所、唐時代 3 箇所、計 172 箇所<sup>2</sup>ある。これらの記述においては、人から虎への変身譚は 15 箇所、虎から人への変身譚は 4 箇所合計 19 箇所ある。なお、この 19 箇所の変身譚については、1 箇所内で同時に人から虎へ、虎から人へという 2 つのパターンが含まれるものは 2 箇所あるため、合わせて 21 通りになる。

### 2.1.1 人から虎への変身譚の概観

人を虎に喩える記載は春秋時代まで遡る<sup>3</sup>ことができるが、人が虎に化ける話の出現はそれよりはるかに下った前漢の時代である。

人が虎に化ける話のある前漢の文献として、『括地圖』、『淮南子』がある。『括地圖』では、人が虎になったことを「越俚之民，老者化為虎」<sup>4</sup>と簡潔に記述され、虎になった理由についての説明がなく、これは文献の性質(地理書)に制約されたためではないかと考えられる。

『括地圖』のように、ある地域の民が虎になる能力を有する話は、それ以降にも、しばしば見られる。例えば『博物志』<sup>5</sup>、『郡國志』<sup>6</sup>はいずれもこれに類似する風土的話である。ところが、風土民俗としての人から虎へ変身する話は、南北朝になると姿が消えた。このような状況は、南北朝では、地理博物誌は志怪文学の初期段階として、徐々に志怪小説に取って代わられたことに原因があると考えられる。

南北朝の志怪小説の隆盛につれて、人から虎への変身譚は、内容が複雑になる傾向が見られる。具体的には、例えば変身の理由についての言及がしばしば現れ<sup>7</sup>、また、虎に化した人間がまた人間の姿に戻る話や、虎と人との間の変身を繰り返す話というような新たなパターンが生まれたこと<sup>8</sup>などである。16 箇所の人から虎への変身譚の中に、虎に化した人間がまた人間の姿に戻る話、或

<sup>2</sup>出典は 98 種類である。

<sup>3</sup>『太平御覧』天部八 叙賢 「文子曰，虎豹之駒未成，而有食牛之氣。鴻鵠之翼未合，而有四海之心。賢者之生亦然也。」。

<sup>4</sup>『太平御覧』偏霸部三 虎下。

<sup>5</sup>『太平御覧』政法部四 變化下 「江漢有羆人，能為虎。俗云羆虎化為人，好著葛衣，其足無踵，有五指者，皆羆也。越嶲之國，老者時化為虎，寧州南見有此物。」。

<sup>6</sup>『太平御覧』疾病部二嶺南道 「郡國志曰，俗以青石為刀劍，如銅鐵法。婦人亦為環玦，代珠玉也。夷人往往化為羆。(羆，小虎也。)」。

<sup>7</sup>例えば『太平御覧』獸部三 變化下 「續搜神記曰，尋陽縣北山中蠻人有術，能使人化作虎，毛色爪牙悉如真虎。…(中略)既至，奴語二人云，汝且上高樹，視我所為。如其言，既而入草，須臾，見一大黃班虎從草出，奮迅吼喚，甚為可畏。二人大怖。良久，還草中。少時，復還為人。…」。

<sup>8</sup>例えば『太平御覧』獸部三 變化下 「齊諧記曰，義熙四年，東陽郡大末縣吳道宗少失父，單與母居，未有婦。道宗收債不在家，鄰人聞其屋中砰磕之聲，窺不見其母，但有烏班虎在其屋中。鄉曲驚惶，恐虎入其家食其母，便鳴鼓會人，以往救之。圍宅突進，不見有虎，但見其母，語如平常，不解此意。兒還，母語之曰，宿罪見追，當有變化。後一月日，便失其母。縣界內虎災屢起，皆云烏班虎。百姓患之，發人格擊之，殺數人。後人射虎中膺，并戟刺中其腹，然不能即得。經數日後，虎還其家故床上，不能復人形，伏床氏而死。其兒號泣。如葬其母法，朝暝哭臨。」。

いはこの変身を繰り返す話が3箇所<sup>9</sup>ある。この3つの話は人間が虎に化してまた人間の姿に戻る、或は変身を繰り返すが最後に虎の姿のまま亡くなるような奇妙な話であるが、いずれも正体が人間である。

動物から人への変身の話において、最終的に動物は正体がばれてしまい、元の姿(動物)に戻る話がほとんどである。それに対し、人から動物への変身の話においては、人間に戻る話が稀である。この点については、上述のような虎に化した人間がまた人間の姿に戻る変身譚は非常に独特な存在だと言えよう。

上記をまとめると、以下の結論が導かれる。①人から虎への変身譚の出現は人を虎に喩える用法より遅い。②南北朝以前の変身譚は内容的にシンプルである。これは、文献の性質によって制約されたのではないかと推測できる。③南北朝以降、変身譚は内容的に複雑になったほか、より文学的になったことも見られる。この点については、南北朝以前の変身譚に比べて変身の理由への言及、および変身を繰り返す話の出現などはそのあらわれかただと思われる。

## 2.1.2 虎から人への変身譚の概観

人間が虎になる話に比べ、虎から人間への変身譚の出現はかなり遅く、数も限られている。その中では、魏晋時代に4箇所、南北朝時代に1箇所ある。前晋時代の『博物志』を出典とする2箇所は、いずれも地理書らしい簡潔な記述である<sup>10</sup>。ところが、その後の『續捜神記』<sup>11</sup>、『敦煌實錄』<sup>12</sup>および『異苑』<sup>13</sup>を出典とする話は、内容から見れば、全部文学性に富んだ物語に見える。

『續捜神記』では、虎が人間や馬に化けて、人間に占いをしてもらうように頼んだ。この話の中では、虎が化けた人間が水を飲む動作などはまだ虎に似ているが、お金を出して占いをしてもらうように頼むというような描写からは、人間性が感じられる。

『敦煌實錄』の虎が人間に化けて、遷都の目的地を教えてもらう話と、『異苑』の虎が化けた女性が人間の男性と付き合い、10日間後に出会ったところまで送るという話は、いずれも虎が人間に対して好意を持っている話である。

上記の3つの物語はいずれも虎が人間と交流するために人間に化したため、化ける理由を「人間と交流する」と考えてよかろう。変身の理由の角度より、人から虎への変身譚と比べると、虎から人へ変身するパターンにおける変身の理由は単純に見える。

## 2.2 変身の理由と変身前後の状態についての考察

本節では、変身の理由を時代順に整理する上で、変身の理由に関する要素をまとめてみる。2.2.1では、変身の理由の変遷を時代を追って見ていく。2.2.2では、変身の理由に関する要素をまと

<sup>9</sup>注8、注9、および『太平御覧』獸部三 變化下 「太玄元年、江夏郡安陸縣馴岳恂、年二十二。少來了了、忽得時行病。差後發狂、百藥治救不署。乃復病狂走、猶劇忽失蹤跡。遂變作虎、食人不可復數。有一女子、樹下彩桑、虎往取之食。食竟、乃藏其釵釧、著山石門。後還作人、皆知取之。經一年、還家為人。遂出都仕官、為殿中令史。夜共人語、忽道天地變怪之事、道恂自云、吾昔常得病發狂、遂化作虎、啖人一年。中兼敘其處所并人姓名。其獸獸人或食父子兄弟者、於是號泣、捉以付官。遂餓死建康獄中。」。

<sup>10</sup>注6を参照する。

<sup>11</sup>『太平御覧』獸部三 虎下 「續捜神記曰、丹陽縣人沉宗居在縣下、以卜為業。義熙中、左將軍檀侯鎮姑熟、好獵、以格虎為事。忽有一人、著皮袴、乘鳥馬、乘者一人亦著皮袴、以紙裹十餘錢來詣宗卜。云、西去覓食好、東去覓食好。眾為作卦、卦成、告之東向吉、西向不利。因就宗乞飲、內口著甌中、狀如牛飲。既出門、東行百步、從者及馬皆化虎。自此以後、暴虎非常。」。

<sup>12</sup>『太平御覧』獸部三 隴右道 「劉昫敦煌實錄曰、晉安帝隆安元年、涼州牧李暠微玄服出城、逢虎道邊、虎化為人、遙呼暠為西涼君、暠因彎弧待之。又遙呼暠曰、有事告汝、無疑也。暠知其異、投弓於地。人乃前曰、敦煌空虛、不是福地。君之子孫王於西涼、不如徙酒泉。言訖、乃失。暠乃移都酒泉。」。

<sup>13</sup>『太平御覧』獸部四 虎下 「異苑曰、太玄末、徐桓出門仿佯、見一女子、因言曲相調。便要桓入草中。桓說其色、乃隨去。女子忽然變成虎、負桓著背上、逕向深山。其家左右尋覓、唯見虎跡。旬日、虎夜送徐桓下著門外。」。



める。

### 2.2.1 変身の理由の変遷

虎と人間の間の変身譚においては、変身の理由が多岐にわたる。特に、2.1.1 に述べたように、人から虎へ変身する理由は前世の罪の現れや病気、神罰など複数のパターンが存在する。

下記の表 1 に示しているように、後晋の時代以前に、変身の理由についての記述がほとんどなく、『淮南子』にしか存在しない。後晋になると、方術による変身というパターンが登場し、変身の理由のパターンは増えてきた。例えば、表 1 の 11 のような前世の罪の現れ、15、18 の神罰による変身が挙げられる。この 2 つのパターンでは、もっとも深層的な変身の理由として、因果応報があると考えられる。また、13 の牛肉を食べた後で起こった変身は、一種の怪異として捉えられる。一方、継承された変身の理由として、病気による変身が挙げられる。病気による変身のパターンは、前漢時代の『淮南子』に遡られるが、南北朝の虎の変身譚において、このパターンはより文学的になった。例えば、表 1 の 12 では、病気で発狂して虎になった記述、および 18 の神罰によって病気になり、その後発狂して虎になった記述は、このパターンの発展と理解してよからう。

表 1 変身の理由（時代順）

番号	時代	太平御覧の見出し	出典	変身の理由
1	前漢	偏 霸 部 三 虎下	括地圖	なし
2	前漢	州 郡 部 十 八 虎上	淮 南 萬 畢術	昔者牛哀病，七日，化而為虎 <sup>14</sup> 。其兄啟戸而入，虎搏而殺之。方其為虎，不知其常為人也。方其為人，不知其且為虎也。（且猶將也。）
3	前漢	職 官 部 五 十 劉聰	史記	なし
*4 <sup>15</sup>	前晋	政 法 部 四 變 化下	博物志	なし
*5	前晋	釋 部 四 虎 下	博物志	なし
6	前晋	疾 病 部 二 嶺 南道	郡國志	なし
#7 <sup>16</sup>	後晋	獸 部 三 變 化下	續 搜 神 記	…尋陽縣北山中蠻人有術，能使人化作虎，…惟於髻中得一紙，畫作大虎，虎邊有符。…
*8	後晋	獸 部 三 虎 下	續 搜 神 記	…忽有一人，著皮袴，乘烏馬，乘者一人亦著皮袴，以紙裹十餘錢來詣宗卜。云，西去覓食好，東去覓食好。…既出門，東行百步，從者及馬皆化虎。自此以后，暴虎非常。
*9	十 六	獸 部 三 隴	敦 煌 實	…逢虎道邊，虎化為人，…又遙呼鬻曰，有事告汝，

<sup>14</sup>下線部は変身の理由についての記述である。

<sup>15</sup>\*番号は虎から人への変身譚である。

<sup>16</sup>#番号は虎に変身した人がまた人間の姿に戻る変身譚である。

	国 西涼	右道	錄	無疑也。嵩知其異，投弓於地。人乃前曰，敦煌空虛，不是福地。君之子孫王於西涼，不如徙酒泉。言訖，乃失。
10	南 北 朝	獸部四 狂	始興記	なし
#11	南 北 朝	獸部三 變 化下	齊諧記	…圍宅突進，不見有虎，但見其母，語如平常，不解此意。兒還， <u>母語之曰「宿罪見迫，當有變化。」</u> 後一月日，便失其母。縣界內虎災屢起，皆云烏班虎。百姓患之，發人格擊之，殺數人。後人射虎中膺，并戟刺中其腹，然不能即得。經數日後，虎還其家故床上，不能復人形，伏床氏而死。其兒號泣。如葬其母法，朝暝哭臨。
#12	南 北 朝	獸部三 變 化下	齊諧記	<u>忽得時行病。差後發狂，百藥治救不署。乃復病狂走，猶劇忽失蹤跡。遂變作虎，食人不可復數。</u> 有一女子，樹下彩桑，虎往取之食。食竟，乃藏其釵釧，著山石門。後還作人，皆知取之。經一年，還家為人。遂出都仕官，為殿中令史。夜共人語，忽道天地變怪之事， <u>道恂自云，吾昔常得病發狂，遂化作虎，啖人一年。</u> 中兼敘其處所并人姓名。其馱載人或有食父子兄弟者，於是號泣，捉以付官。遂餓死建康獄中。
13	南 北 朝	獸部三 變 化下	齊諧記	<u>凡食此牛肉，男女二十余人，悉變作虎。</u>
14	南 北 朝	獸部四 變 化下	異苑	なし
15	南 北 朝	獸部四 虎 下	異苑	<u>神怒，即下教於巫曰，桓貸以生肉貽我，當謫令自食也。</u> 其年便作虎。作虎之始，見人以班衣衣之，即能跳透嚙逐。
*16	南 北 朝	獸部四 虎 下	異苑	太玄末，徐桓出門仿佯， <u>見一女子，因言曲相調。便要桓入草中。</u> 桓說其色，乃隨去。女子忽然變成虎，…旬日，虎夜送徐桓下著門外。
17	南 北 朝	獸部四 虎 下	述異記	なし
18	南 北 朝	獸部四 猴	述異記	爾夜， <u>夢見一人稱神，以殺猴責讓之。</u> 后考之病鞠挾，初如狂， <u>因漸化為虎，毛鬣爪牙悉生，音聲亦變。</u> 遂逸走入山，永無蹤跡。
19	南 北 朝	獸部二十一 小劉后	三十國 春秋前 趙錄	なし

上記をまとめると、以下の結論が得られる。①後晋以前の虎の変身譚には、変身の理由についての言及がほとんどなく、後晋以降、変身の理由への言及は多くなった。②南北朝になると、因

果応報の思想を反映する虎の変身譚が登場した。③病気による変身の初出は『淮南子』<sup>17</sup>であるが、南北朝になると、病気によって発狂して、そして変身するというパターンが出現した。

### 2.2.2 変身前後の状態

『太平御覧』において、病気にかかって動物へ変身した話は、虎への変身しか存在しない。その源となる話は、『淮南子』(表1の2)に記載された病気により虎に変身する話だと思われる。ただし、『淮南子』にあるこの話を最後に「方其為虎，不知其常為人也(虎でいる間、かつて人間であったことを知らない)。方其為人，不知其且為虎也(人間でいる間、まもなく虎になることを知らない)」と言でまとめ、変身によって前後の精神が完全に切り離されていることを明示した。つまり、人間から虎への変身は自覚的な変身ではないことを示している。言い換えれば、虎状態の人間は、外観が虎になっただけでなく、心まで虎になったのである。『淮南子』以外に、後晋以前の虎の変身譚の中に、変身前後の状態に言及する箇所はない。

後晋以降、自覚的な変身が登場した。例えば、表1の7、14<sup>18</sup>では、自分がまもなく虎になることを知っている。11、12では、虎でいた間の出来事を覚えている。これらの記述は、自覚的な変身であることを示していると考えられる。後晋以降に書かれた、ほかの虎の変身譚には、変身前後の状態についての言及がないため、変身前後の状態に言及した4箇所はいずれも自覚的な変身であることが現在把握できる情報である。

上記をまとめると、以下の結論が得られる。後晋以前に、変身前後の状態についての言及のある文献は、前漢時代に書かれた『淮南子』しか存在しない。この文献には、変身前後の精神状態は完全に切り離される状態であり、変身は外部および内部の完全な変身であることを強調した。後晋以降、変身前後の状態についての言及は4箇所ある。この4箇所はいずれも外部だけの変身で、身体が虎になっても、多かれ少なかれ人間の心を保っている。

## 3 「山月記」と「人虎伝」における虎の変身譚

「山月記」と「人虎伝」の比較研究が多数存在する。「人虎伝」は、『太平広記』、『古今説海』、『唐代叢書』(『唐人説薈』)に収録されている。「山月記」が依拠したのは『唐代叢書』に収録された「人虎伝」とされる<sup>19</sup>。本章では、「山月記」および『唐代叢書』に収録された「人虎伝」における虎の変身譚の変身理由、変身前後の状態について考察する。

### 3.1 「山月記」における虎への変身の理由および変身前後の状態

#### 3.1.1 「山月記」における虎への変身の理由

虎になった原因として、「山月記」においては、次のような理由が掲げられている。

「隴西の李徴は博学才穎…性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いたのちは、故山、號略に歸臥し、人と交を絶って、ひたすら詩作に耽った。…中略…一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遥か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の偽才李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々として樂

<sup>17</sup> 富永(1978)、p.9。

<sup>18</sup> 『太平御覧』獸部四 變化下 「異苑曰、豫章郡吏易拔、義熙中、受番還家、遠遁不反。郡遣追見拔、言語如常、亦為施設。使者催令莊束、拔因語曰、汝看我面。仍見眼目角張、身有黃班。便豎一足、徑出門去、家先依山為居、至林麓變成三足大虎、所豎之足即成其尾。」

<sup>19</sup> 上尾(1974)。

しまず、狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、遂に発狂した。…中略…己の殊なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することもできなかった。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。」

上記のように、「山月記」では、李徴が虎になった原因は精神的な問題であるということがわかる。具体的には、「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」が傷つけられたことによって、李徴はついに発狂し、虎になったと記述されている。

### 3. 1. 2 「山月記」における虎への変身前後の状態

発狂した李徴は駆け出し、二度と戻ってこなかったが、虎に化した李徴の状態は、哀惨との対話から読み取れる。

「一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。…中略…その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残虐な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤らしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。…今少し経たてば、己おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋うもれて消えて了しまうだろう。」

上述のように、李徴は虎になった経過および虎になってからの体の変化について語った。虎になった李徴は、無我夢中の状態で虎となって、その後人間の心と獣の心が交替する状態になり、人間の心が次第に獣の心にとって代われつつある。身体が虎になったが、時々人間の心がかえってくることから、「山月記」における李徴の変身は、外部と内部の完全な変身であるとは言いがたい。ただし、獣の習性に支配される状態が存在し、しかも次第に長くなっていくことから、外部と内部の完全な変身になりうるとは言えよう。

### 3. 2 「人虎伝」における虎への変身の理由および変身前後の状態

#### 3. 2. 1 「人虎伝」における虎への変身の理由

「人虎伝」において、虎に変身する原因として、以下のような理由が示される。

「隴西李徵…中略…徵性疏逸，恃才倨傲，不能屈跡卑僚。嘗鬱鬱不樂。每同舍會，既酣，顧謂其群官曰，生乃與君等為伍耶。其寮友咸側目之。及謝秩則退歸閒適。不與人通者近歲餘。後迫衣食，乃東遊吳楚間，以干郡國長吏。…中略…忽被疾發狂，鞭捶僕者。不勝其苦。於是旬餘，疾益甚。無何，夜狂走，莫知其適。家僮跡其去而伺之，盡月而徵見不同。於是僕者驅其乘馬，挈其囊橐，而遠遁去。…中略…非不念妻孥，思朋友。直以行負神祇，一日化為異獸，有覩於人，故分不見矣。嗟乎，我與君同年登第，交契素厚。君今日執天憲，耀親友。而我匿身林藪，永謝人寰。躍而呼天，俛而泣地。身毀不用，是果命乎。…中略…虎曰，二儀造物，固無親疎厚薄之間。若其所遇之時，所遭之數，吾又不知也。噫顏子之不幸，冉有斯疾。尼父常深歎之矣。若反求其所自恨，則吾亦有之矣。不知定因此乎。吾遇故人，則無所自匿也。吾常記之，於南陽郊外，嘗私一孀婦。其家竊知之，常有害我心。孀婦由是不得再合。吾因乘風縱火，一家數人盡焚殺之，而去。此為恨爾。」

上記の記述から見れば、「人虎伝」において、李徵が虎になった原因は2つあると考えられる。上尾（1974）は「人虎伝」における変身の理由について、①唐代の知識人の精神的な問題、②因果応報 という2点を挙げた。上尾（1974）によると、「非不念妻孥…，是果命乎。…」の記述から、虎へ変身するもっとも根本的な理由は唐代の知識人の精神的な問題にかかわっていると主張している<sup>20</sup>。つまり、唐代の知識人の共通の願望——高官になる願望が叶えず、「性狷介にして人を容れず」というのは虎になった理由であるとされる。また、上尾（1974）では、話の寡婦と通じ殺人まで行う部分は因果譚であるとされている。

筆者は、この話において、因果譚がもう1つあると考える。「直以行負神祇，一日化為異獸（ただ行ないが天地の神に背いたため、ある日化して異獣になった）」は変身の理由を神に違背したことと帰結したため、因果応報の話だと考える。

李徵の変身と直接につながったのは、病気である。李徵は病気にかかって発狂し、そして病が十日間以上長引き、ますます深刻になり、虎になったのである。

### 3.2.2 「人虎伝」における虎への変身前後の状態

虎になった李徵は、「山月記」のとは異なり、人の意識を保っている。具体的には、以下のような描写から見受けられる。

「忽嬰疾發狂。夜聞戶外有呼吾名者，遂應聲而出，走山谷間。不覺以左右手攫地而步。自是覺心愈狠，力愈倍。及視其肱髀，則有毛生焉。心甚異之。既而臨溪照影，已成虎矣。悲慟良久，然尚不忍攫生物食也。既久飢不可忍，遂取山中鹿豕獐兔充食。又久諸獸皆遠避無所得。飢益甚一日。有婦人從山下過，時正餒迫徘徊數四，不能自禁，遂取而食，殊覺甘美。今其首飾猶在巖石之下也。自是見冕而乘者，徒而行者，負而趨者，翼而翔者，毳而馳者，力之所及，悉擒而阻之。立盡率以為常。…中略…虎曰，我今形變而心悟耳。自居此地，不知歲月多少，但見草木榮枯耳。」

上記のように、虎になった李徵は、人を食うにもかかわらず、人間の意識を保っている。また、袁傜との対話から、かつて人間であった時の出来事などを覚えていることがわかる。つまり、「人虎伝」における虎への変身は、自覚的な変身であり、外部は虎になったことにもかかわらず、内部はまだ人間である。

## 4 「山月記」、「人虎伝」における唐以前の虎の変身譚要素の継承

本章では、変身の理由と変身前後の状態という2つの側面から、「山月記」と「人虎伝」は唐以

<sup>20</sup>上尾（1974）p. 98。



前の虎の変身譚の何の要素を継承したのかについて考察する。

4.1 では「山月記」、4.2 では「人虎伝」から見られる唐以前の虎の変身譚の要素をまとめる。

#### 4.1 「山月記」における唐以前の虎の変身譚要素の継承

3.1.1 で述べたように、「山月記」において、虎へ変身するもっとも深層的な理由は精神的な問題である。具体的には、例えば原文の「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」などが挙げられる。この抽象的な理由は、唐以前の虎の変身譚に存在していないが、「山月記」の材料となる「人虎伝」で触れることがある。ゆえに、この理由の出現は唐代になり、まさに上尾（1974）が主張していたように、唐の知識人の意識のあり方にかかわると推測される。

また、直接に変身につながった理由は発狂である。発狂による変身は、「人虎伝」にもそうであるが、南北朝時代の虎の変身譚に見られる。ところが、南北朝時代の発狂による変身は、病気が介在するパターンである。「人虎伝」における病気によって発狂し、遂に虎になるパターンはこのパターンであるが、「山月記」には病気の介在がない。

変身後の状態について、2.2.2 で述べたように、前漢時代に書かれた『淮南子』においては、変身前後の精神状態は完全に切り離される状態であり、変身は外部および内部の完全な変身であることがわかった。後晋以降、外部だけの変身が主流となり、身体が虎になっても人間の心を保っているようになった。さらに、3.1.2 で述べたように、「山月記」における変身は、完全な変身と不完全な変身の間に徘徊し、徐々に完全な変身になる傾向がある。この点では、「山月記」の依拠した「人虎伝」とは大きく異なる。

上記をまとめると、以下の結論が得られる。①「山月記」における変身の深層的な理由は「人虎伝」から由来するものと推測される。②直接に変身につながった理由は発狂であり、発狂による変身のパターンは南北朝の虎の変身譚から由来するものだと考えられる。③「山月記」において、完全な変身と不完全な変身が繰り返す。これは、唐以前の虎の変身譚においても、「人虎伝」においても見当たらない。

#### 4.2 「人虎伝」における唐以前の虎の変身譚要素の継承

3.2.1 で述べたように、「人虎伝」における変身のもっとも深層的な理由として、①唐代の知識人の精神的問題と②因果応報という2つの理由が挙げられる。2.2.1 で述べたように、因果応報による変身は、南北朝時代に登場したパターンである。

また、変身に直接にかかわってくる理由として、変身の仕方と言ってもよいが、病気による発狂が挙げられる。3.1 で述べたように、このパターンは南北朝の病気によって発狂し、虎になったパターンの継承と見做すことができる。

「山月記」とは異なり、「人虎伝」において、李徴の身体が虎になったが、心は完全に人間である。このようなパターンは、後晋以降の虎の変身譚の主流である。

「人虎伝」において、以下のような記述がある。

「有婦人從山下過，時正餒迫徘徊數四，不能自禁，遂取而食，殊覺甘美。今其首飾猶在巖石之下也。」

虎に変身した李徴は、自分に食われた婦人の装身具はまだ岩の下に置いてあるということを語った。この描写は、表1の12、南北朝に書かれた『齊諧記』にある描写に似ている。

上記をまとめると、以下の結論が得られる。①「人虎伝」における変身の深層的な理由として、因果応報が挙げられる。因果応報による変身は南北朝時代に生まれたパターンである。②病気による発狂という変身の仕方は、南北朝時代に登場したパターンの継承と見做される。③「山月記」とは異なり、「人虎伝」は後晋以降の虎の変身譚に大きく影響されたと考えられる。

## 5 おわりに

唐以前の虎の変身譚は、変身理由の有無や変身前後の状態の描写などの側面から、後晋以前と後晋以降という2つの段階に分けられる。後晋以前では、変身の理由についての言及がほとんどなく、変身は内部および外部の完全な変身である。後晋以降では、変身の理由についての言及が多くなり、理由も多岐にわたる。また、変身は外部だけの変身で、身体が虎になっても、多少人間の心を保っている。

上記の変身の理由、変身前後の状態からみれば、唐代の伝奇小説の「人虎伝」は、後晋以降の虎の変身譚の影響を大きく受けていた。「山月記」には「人虎伝」の直接な影響が見られる一方、変身の理由および変身前後の状態の面では、中国唐以前の虎の変身譚からの影響が小さい。

### 参考文献：

1. 上尾龍介「人虎伝と山月記」、Studies in Chinese Literature 4、九州大学中国文学会、pp. 91-104、1974年。
2. 富永一登「「人虎伝」の系譜—六朝化虎譚から唐伝奇小説へ—」、中国中世文学研究 (13)、中国中世文学会、pp. 1-17、1978年。
3. 胡湖「中国的虎故事与虎文化——以古代文言叙事作品为中心」、上海師範大学修士論文、2009年。
4. 汪玢玲『中国虎文化』、中華書局、2007年。
5. 鄭高詠「虎のイメージに関する一考察——中国のことばと文化」、「言語と文化(12)」、愛知大学語学教育研究室、pp. 113-134、2005年1月。